

# 松本市沢村旧射的場西遺跡

変電所建設に伴なう緊急発掘調査概報



金環（第1号住居址）

1989・3

松本市教育委員会

## 序

市街地北部の沢村地区は、古くから多くの遺跡の存在が知られております。今回この地に中部電力鐵ヶ崎変電所の建設が計画され、それに先立ち緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることになりました。

調査は中部電力より松本市教育委員会に委託され、昭和63年6月16日から8月11日に亘り行なわれ、多くの成果を収め、無事終了することができました。僅かな範囲から発見された、縄文時代から中世に渡る多くの住居址などは、地域の歴史解明の貴重な資料となります。また私達の日常生活の場に非常に近い地での古代の生活との出会いは、大変な驚きを感じるものであります。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました中部電力をはじめ、調査に御協力をいただいた皆様に心から感謝申し上げまして序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会教育長 中島 俊彦

## 例 言

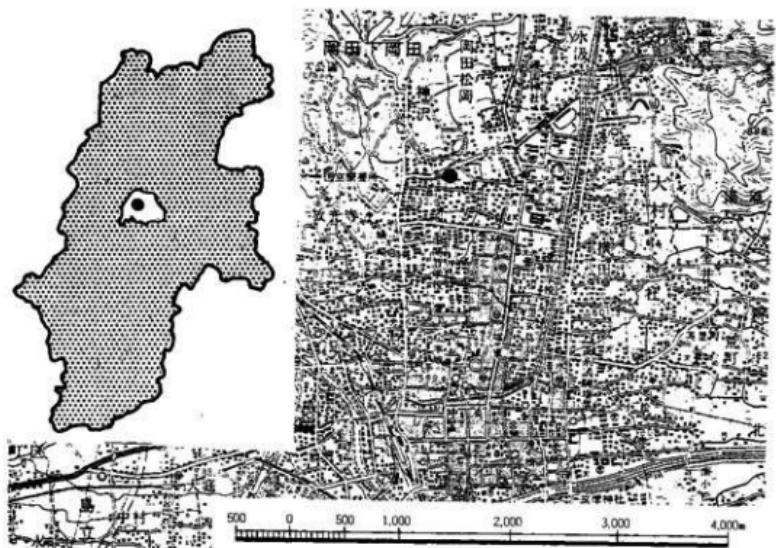
1. 本書は昭和63年6月16日から8月11日にかけて行なった、松本市沢村旧射的場西遺跡の発掘調査の概報である。
2. 本調査は、中部電力株式会社の鐵ヶ崎変電所建設工事に伴う緊急調査であり、松本市教育委員会が、中部電力より委託を受けて調査を行なった。
3. 本遺跡の名称は『長野県史』の地名表等では旧射的場西となっており、事業実施時にもこの名称を用いた。しかし正式には旧射的場西であり、本書ではこの名称を用いた。なお遺跡の位置は旧射的場の北にあたり、旧軍施設の名称も射撃場が正しい。このため今後名称については再検討が要される。
4. 本書の執筆は一筆を熊谷康治、他は新谷和孝が行なった。編集にあたっては藤澤智恵子の協力を得た。
5. 本書の作成にあたっては、出土遺物より遺存状態の良好なものを抽出し、図化等を行なった。従って本書に図示した遺物は全体の一部のみである。
6. 本書の作成にあたっての諸作業は下記のものが行なった。  
五十嵐周子、伊丹早苗、岩野公子、開崎八重子、金井ひろみ、網島正道、永沢周子、町田庄司、水澤幸一、新谷和孝
7. 整理及び執筆にあたっては、島田哲男（縄文土器）、関沢聰（石器）、直井雅尚、原明芳（古墳時代以降の遺物）、太田守夫、森義直（自然科学）、宮崎洋一（写真）の諸氏に御教示、御協力をいただいた。
8. 図及び観察表中のHは土師器、Sは須恵器を示す。
9. 出土遺物、図面、関係書類等は松本市教育委員会が保管している。

## 目 次

I 調査の経緯	3
II 遺跡の環境	5
III 調査の結果	6
縄文時代の遺物	8
古墳～平安時代の遺構と遺物	10
住居址	10～20
その他の遺構、遺物	20～22
IV まとめ	24
図 版	25

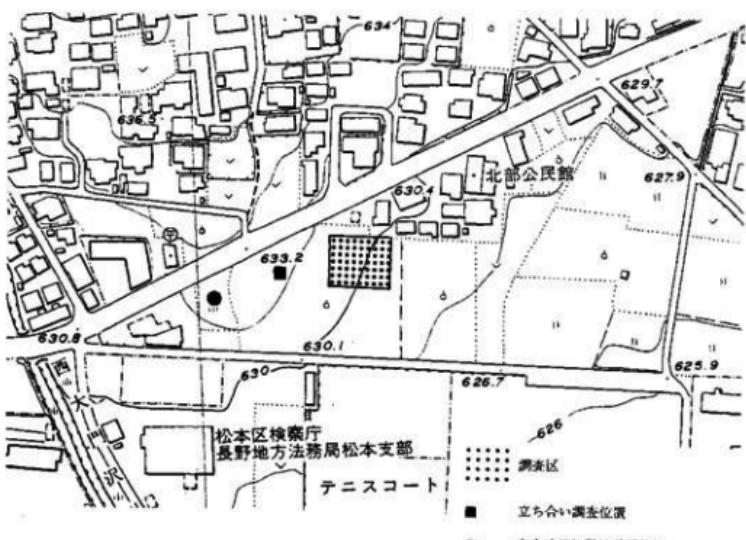
## 図 目 次

1 遺跡の位置 (1 : 50000)	2	18 第5号住居址 (1 : 60)	16
2 調査位置図 (1 : 2500)	2	19 第5号住居址カマド (1 : 20)	16
3 周辺遺跡地図 (1 : 25000)	4	20 第5号住居址の遺物 (1 : 4)	16
4 調査区全体図 (1 : 160)	6、7	21 第2号住居址 (1 : 60)	17
5 縄文時代の遺物 その1 (1 : 3)	8	22 第2号住居址の遺物 (1 : 4)	17
6 その2 (1 : 3)	9	23 第10号住居址 (1 : 60)	18
7 第1号住居址 (1 : 60)	10	24 第10号住居址カマド (1 : 20)	18
8 第4号住居址 (1 : 60)	10	25 第10号住居址の遺物 (1 : 4)	18
9 第1号住居址カマド (1 : 20)	11	26 第8号住居址 (1 : 60)	19
10 第1、4号住居址の遺物 (1 : 4)	12	27 第8号住居址の遺物 (1 : 4)	19
11 第7号住居址 (1 : 60)	13	28 第9号住居址 (1 : 60)	20
12 第7号住居址カマド (1 : 20)	13	29 建物址 (1 : 60)	21
13 第7号住居址の遺物 (1 : 4)	13	30 火葬墓 (1 : 60)	21
14 第6号住居址 (1 : 60)	14	31 燃土坑 (1 : 60)	21
15 第6号住居址の遺物 (1 : 4)	14	32 燃土坑の遺物 (1 : 4)	21
16 第3号住居址 (1 : 80)	15	33 調査区外出土の遺物 (1 : 4)	21
17 第3号住居址の遺物 (1 : 4)	15		



第1図 遺跡の位置 (1/50000)

● 遺跡



第2図 調査位置 (1/2500)

● 奈良時代住居址確認位置

## | 調査の経緯

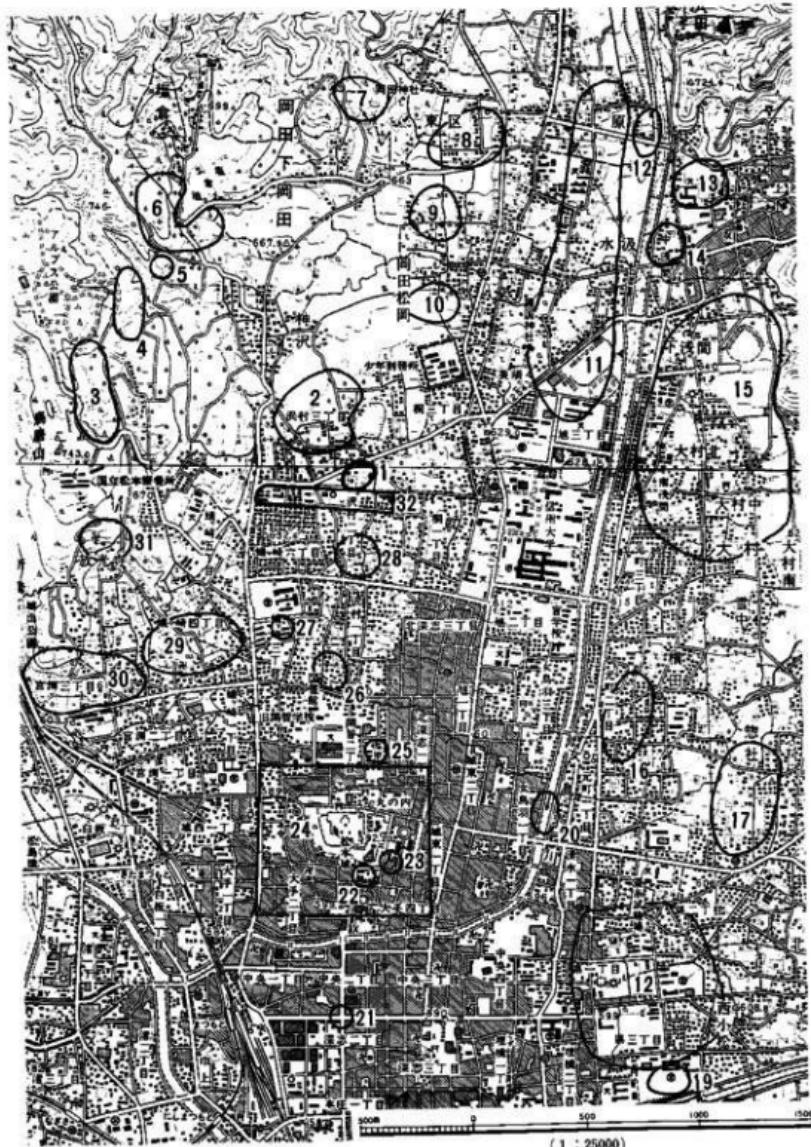
### 1. 調査に至る経緯

中部電力株式会社より、松本市沢村2丁目地籍に変電所建設の計画があり、用地内の埋蔵文化財の有無についての照会が当教育委員会に届いたのが昭和62年3月であった。当該用地は、長野県市町村別遺跡一覧表、長野県史に「旧射的場面」として記載されている遺跡の範囲内であったため、折り返しその旨を連絡し、当該文化財保護のための事前協議の開催を要請した。昭和62年10月と12月に中部電力株式会社の担当者に来庁いただき、事前協議を実施して当該文化財の重要性を御理解願うとともに、緊急調査による記録保存で対応する場合は調査費用の負担についても依頼した。その結果、当該文化財の保護方法としては、発掘調査を実施して記録保存を図ることとし、発掘調査は中部電力株式会社の委託を受けて松本市教育委員会が行なうこととなった。

発掘調査は、昭和63年4月30日に中部電力株式会社と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年5月27日に旧射的場面遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知を提出、6月から実施に至った。  
(遺跡名の変更については例旨で述べたとおり。)

### 2. 調査体制

調査団長	中島俊彦	(松本市教育委員会教育長)
調査担当者	神沢昌二郎	(市立考古博物館長)
現場担当者	新谷和孝	(社会教育課嘱託)
調査員	土橋久子	(長野県考古学会員)、三村肇(長野県考古学会員)
協力者	青柳洋子、石川末四郎、太田千尋、大塚袈裟六、大村良成、金子富人、川畑和子、小池直人、小松正子、酒井文雄、正寺裕見子、白井文、莊茂雲、袖山勝美、綱島正道、常深正樹、中島裕英、中村恵子、林昭雄、藤本嘉平、堀洋子、水澤幸一、吉澤克彦、若井孝夫、三村竜一、松沢利幸	
事務局	浅輪幸一(社会教育課長)、田口勝(文化係長)、熊谷康治(主査)、直井雅尚(主事)、山岸清治(事務員)、三沢利子、佐々木仁美	



第3図 周辺遺跡地図

## II 遺跡の環境

本遺跡は市街地北部の沢村2丁目に位置する。城山から続く南向きの斜面上で、女鳥羽川により形成された段丘が、大門沢川と西大門沢川に削られ、2つの川に挟まれた台地状の地形となっている。土壌は、石英閃緑岩を含む二次堆積ロームと、ロームが混在して基盤をなし、その上に現在の表土及び耕作土である、暗灰がかった褐色土が堆積している。

一帯は、古くから桑畠や果樹園として利用されてきたが、明治38年、松本に陸軍第五十連隊が創設されると、現在の法務局からテニスコートにかけて、蠍ヶ崎射撃場が設置され、関連施設が作られた。太平洋戦争終了後、これらの施設は廃止となったが、昭和25年、朝鮮戦争の開始で警察予備隊が作られ、松本への駐留が始まると、射撃場の使用が再開された。しかし住民による反対運動などを経て、昭和31年に廃止されている。近年は周辺の宅地化が進み、当時の面影はない。

城山からの一帯は古くから遺跡の存在が知られ、鳥居龍藏、両角守一、森本六爾らの研究者が訪れた記録がある。しかし本格的な調査は行なわれておらず、その様相は不明な点が多い。

本遺跡も古くから知られ、縄文、弥生、古墳の各時代の遺物の出土が知られている。特に現在日本民俗資料館所蔵の埴輪は市内で唯一の出土例として貴重である。また未報告であるが、今回の調査区の西側（第2図●印）で奈良時代の住居址一軒が調査されている。

周辺遺跡地名表

1 旧射的場西遺跡	繩、弥、古、奈、平	17 楊社宮北遺跡	繩、弥、平
2 狐塚遺跡	繩、弥、古、平	18 あがた遺跡	繩、弥、古、奈、平
3 家の平遺跡	繩、弥、平	19 埋橋遺跡	繩
4 神沢遺跡	繩	20 女鳥羽川遺跡	繩、古、平
5 塚山古墳		21 本町五丁目遺跡	繩
6 塩倉遺跡群	繩	22 大名町信用金庫遺跡	
7 岡田神社裏遺跡		23 丸の内遺跡	繩
8 田中遺跡		24 松本城	
9 松岡遺跡	古、平	25 田町遺跡	繩
10 どうこん原	古	26 沢村遺跡	弥
11 水汲古墳群		27 優頭塚古墳	
12 五反田遺跡	弥、古	28 沢村北遺跡	弥
13 本郷小学校遺跡		29 蠍ヶ崎遺跡	平
14 梅田遺跡		30 城山原遺跡	繩、弥、古、平
15 大村遺跡	繩、平	31 放光寺遺跡	繩、弥
16 古屋敷遺跡	古、平	(32) 陸軍蠍ヶ崎射撃場	

時期は判明しているもののみ記した。繩：縄文、弥：弥生、古：古墳、奈：奈良、平：平安

### III 調査の結果

#### 1. 調査の経過

- 6月16、17日 重機により、ブドウ棚等の除去、引き続き表土剥ぎを行なう。
- 6月20日より検出及び包含層の掘り下げを行なう。
- 6月22、23日 測量用座標設定
- 7月5日 遺構の掘り下げを開始する。夕方隣接する工事現場の立ち会い調査を行ない住居址1軒を確認する。
- 7月19日 遺構の測量を開始する。
- 7月30日 土坑を除く全遺構の掘り下げ終了。
- 8月1日～10日 測量及び写真撮影を行なう。
- 8月11日 全作業を終了。以後整理、報告書作成を行なう。

調査期間は約2ヶ月であったが、梅雨のため作業のできない日が多く、実質日数は32日であった。

#### 2. 調査の結果

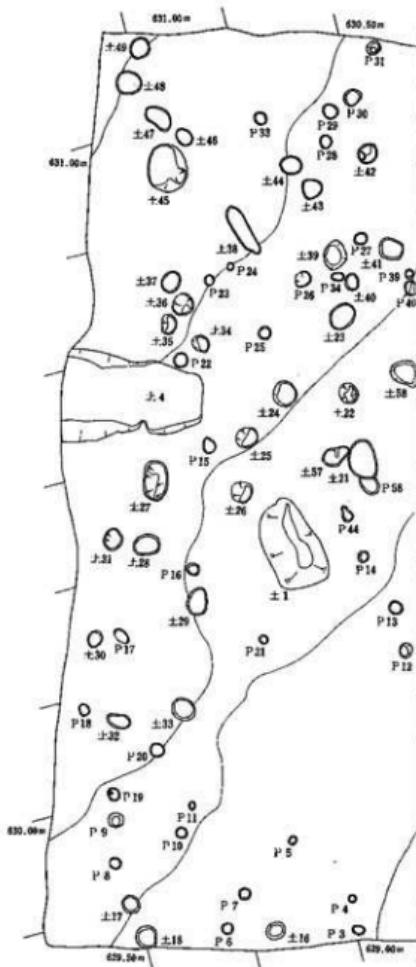
今回の調査で検出された遺構は次の通りである。

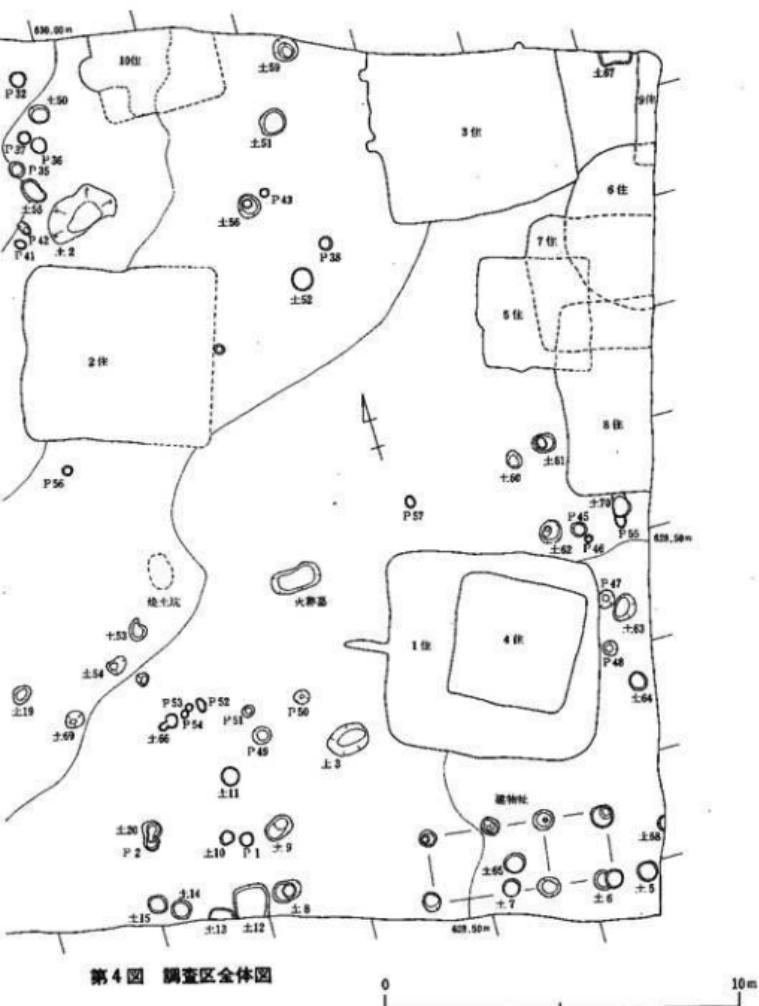
住居址 10 建物址 1

土坑 70 ピット 58

(両者の区別については、長軸50cm以上のものを土坑、それ以下のものをピットとした。)

火葬墓 1 焼土坑 1

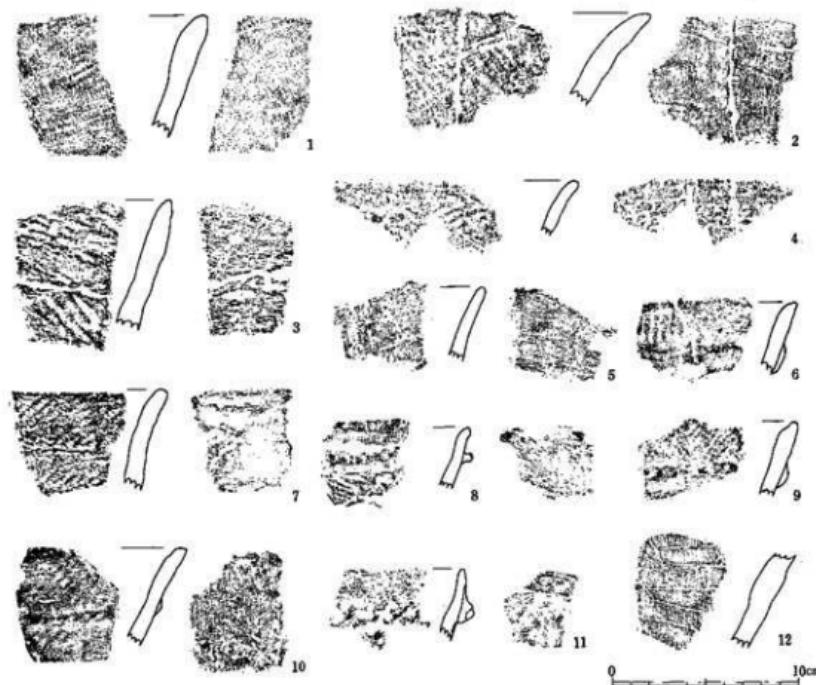




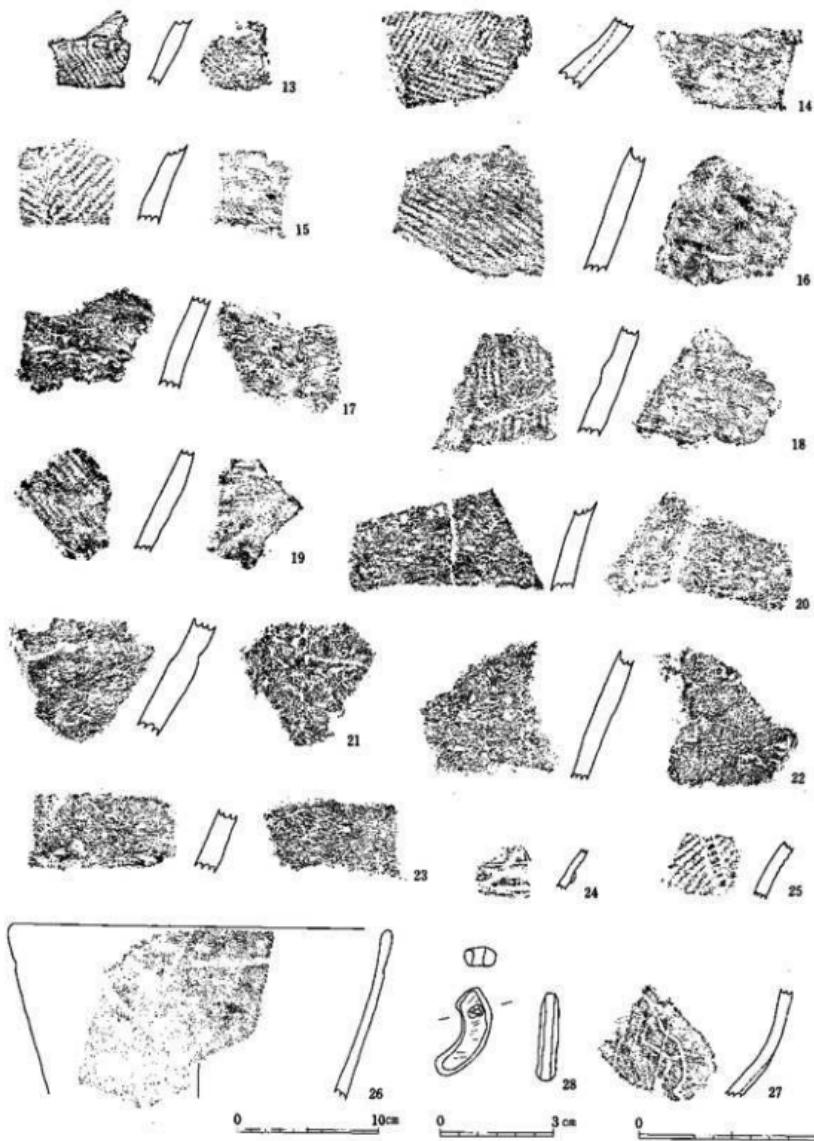
第4図 調査区全体図

### 3. 繩文時代の遺物（第5、6図）

今回の調査では、土器がコンテナ約1箱、石器は石鏃約40点等、合計數十点が出土した。遺物のほとんどが検出面と包含層からの出土で、遺構に伴なうものはわずかである。調査区の南西斜面からの出土が多く、部分的な集中等はみられない。今回は土器27点と石製品1点を図示するのみで、石器については別の機会に報告したい。土器は早期末から前期初頭のものが主体で、他の時期のものがわずかにある。1~23は早期末から前期初頭の土器である。いずれも胎土に多量の纖維を含む。1は口縁の表裏に繩文が施されている。8~11は口縁の下部に突帯を巡らせてている。11、12は細い沈線が施されている。いわゆる中越式直前の土器である。13~22は体部の破片である。文様は繩文の他に棒状工具による刺突（17、18）などがある。ほとんどが風化が著しく遺存状態は良くない。24は粘土紐の上に刻みを入れている。東海系の土器である。25は前期後葉、26は中期後葉、27は後期前葉の土器である。28は滑石製の飾り玉である。所属時期は後期と考えたい。

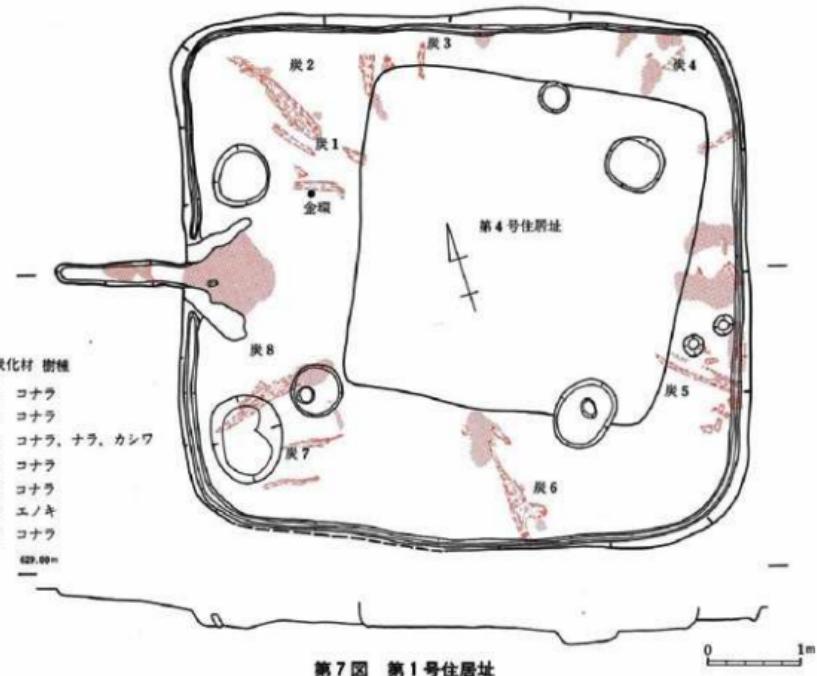


第5図 繩文時代の遺物（その1）

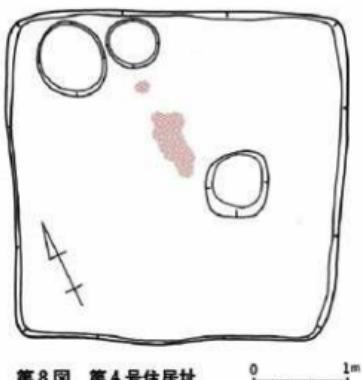


第6図 縄文時代の遺物（その2）

#### 4 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

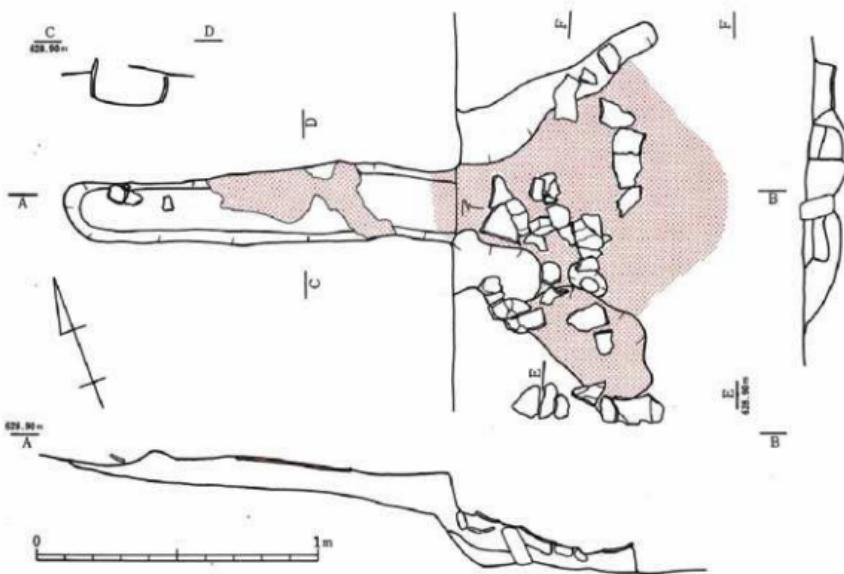


第7図 第1号住居址



第8図 第4号住居址

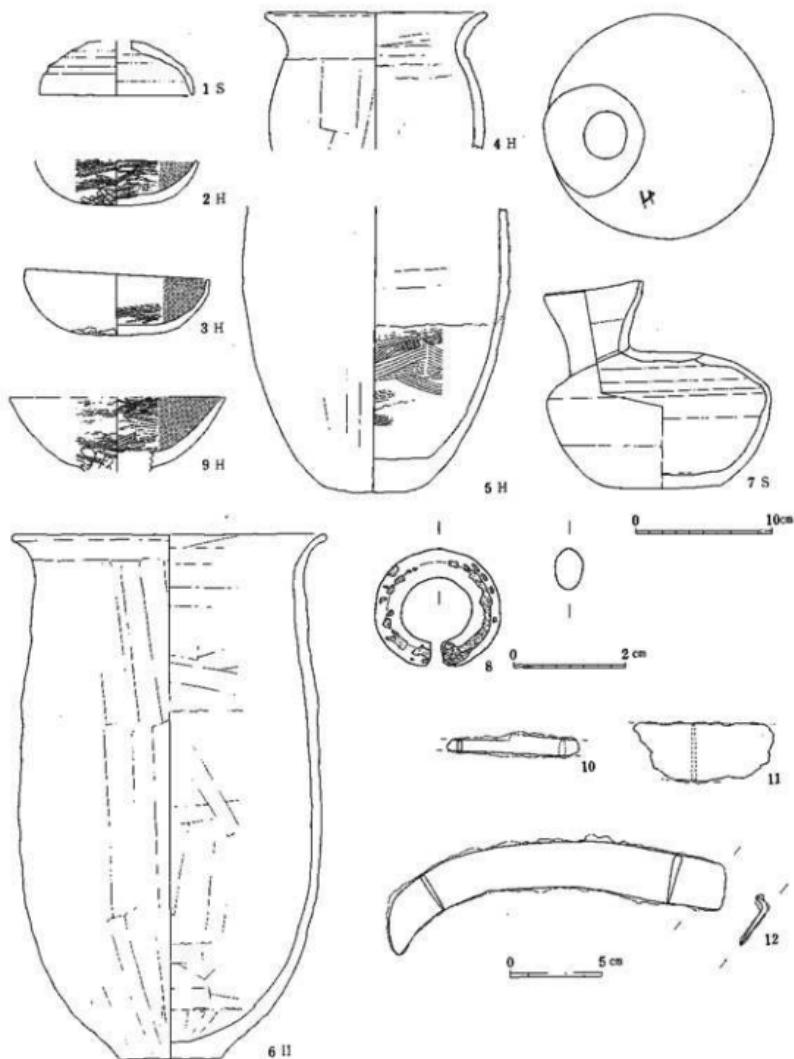
**第1号住居址 (第7図)** 調査区の南東に位置する。中心部を第4号住居址に切られる。南北4.5m東西5.8mの隅丸方形で、主軸はN-72°-Wである。火災で廃絶され、埋土に多量の焼土を含む。床はロームを固め堅鐵である。床上の全面に炭化材が倒れている。壁は地形に沿い上下し壁高は平均27cmである。カマド部を除き周溝が巡る。カマド (第9図) は粘土組みで中央に支脚石をもち、壁外に煙道が延びる。本体、煙道とも崩落しているが、遺存状態は良好で、ドーム状の構造を



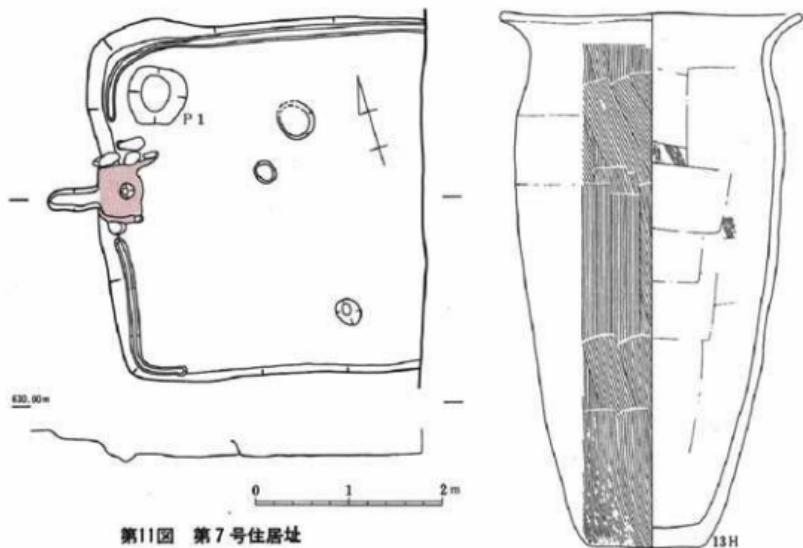
第9図 第1号住居址カマド

わずかにとどめる。ピットは8つ検出された。P1、2は柱痕とみられる段をもち、方向も主軸に平行することから柱穴と思われるが、その他は性格不明である。カマド内からは土師器の甕3個体（第10図4～6）が出土した。須恵器の平瓶（第10図7）の内面には暗褐色の付着物がみられる。この付着物は液状の飲食物の残滓と思われる。（森義直氏の御教示による。）金環（第10図8）は炭化材を除去した下の床上より出土した。全体に小さな剥落がみられるが遺存状態は良好である。住居址からの金環の出土は、松本市では、1984年調査の島立南栗遺跡77号住居址に続き2例目である。（他に未報告だが1988年調査の島立北栗遺跡でも一例出土している。）本址の時期は出土遺物より、7世紀末と考えられる。

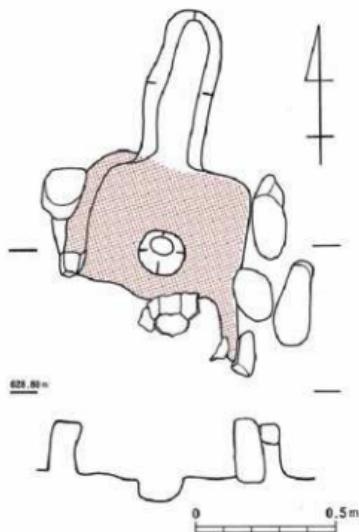
**第4号住居址（第8図）** 第1号住居址の埋没後にその中央部を掘り込んで作っている。南北3.4m、東西3.5mの方形で、主軸はN-72°-Wである。床は第1号住居址の床より深く、ロームを固めており、堅緻である。カマドの位置は確認できなかった。ピットは3つ検出されたが、性格は不明である。遺物は少なく、図示した4点（第10図9～12）の他砥石が数点出土している。鉄器は10が刀子、11、12が鎌である。本址の時期は出土遺物より、8世紀初頭と考えられる。



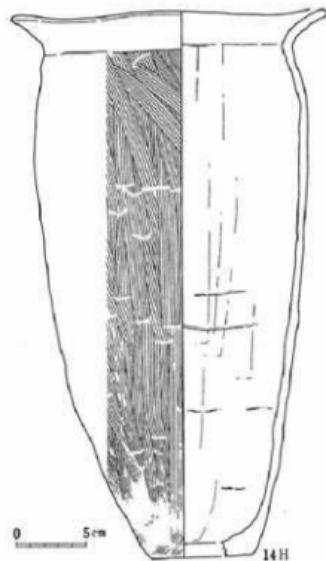
第10図 第1、4号住居址の遺物



第11図 第7号住居址



第12図 第7号住居址カマド



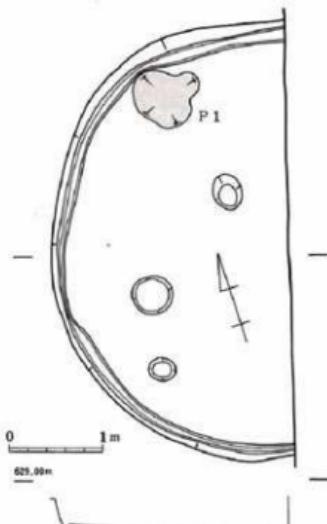
第13図 第7号住居址の遺物

### 第7号住居址（第11図）

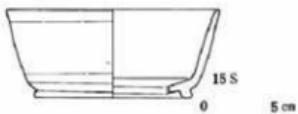
調査区の北東に位置する。本址の廃絶後、第5、6、8号の各住居址が本址に重複して作られている。南北3.8m、東西3.4mの隅丸方形で主軸はN-78°-Wである。東側は調査区外へ延びている。床は黒土のわずかに混じったロームを固めており、堅緻である。壁は重複する住居址に破壊され、わずかに遺存するのみである。カマドの部分と西壁を除き、周溝が巡る。カマド（第12図）は西壁の中央やや北に位置する。石芯粘土組みで、中央に支脚の痕と思われるピットを持ち、煙道が壁外へ延びる。天井部は遺存せず、袖石の一部は第5号住居址の床面に出ている。ピットは4つ検出され、P1からは土師器の甕（第13図14）がつぶれて出土した。遺物は図示した2点の他、土師器、須恵器の壺数片が出土したのみである。13の甕はカマドの前部より出土した。本址の時期は出土遺物より、8世紀前葉と考えられる。

### 第6号住居址（第14図）

調査区の北東に位置する。第7号住居址を埋め、第3、5、8、9号の各住居址に切られる。南北4.6m、東西2.5mの円形または角が大きく丸くなる方形のプランと思われる。東側は調査区外へ延びる。床は黒土の混じったロームを固めており、第7号住居址とのレベル差は5cmほどである。壁は重複する住居址により破壊されるが、壁高30cmを越えるものと思われ、調査部分の全周に周溝が巡る。カマドは確認されなかつたがP1の中に焼土があり、土師器の甕（図示していない）が出土した。遺物の量は多いが、復元、図示できたのは須恵器の壺（第15図15）1点のみである。また器種不明の綠釉陶器片1点が出士している。本址の時期は出土遺物より、8世紀の後葉と考えられる。



第14図 第6号住居址

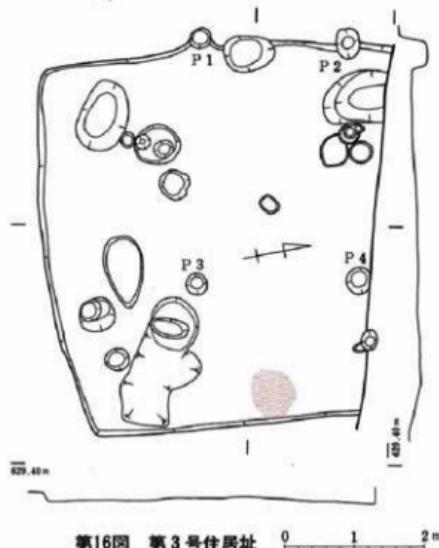


第15図 第6号住居址の遺物

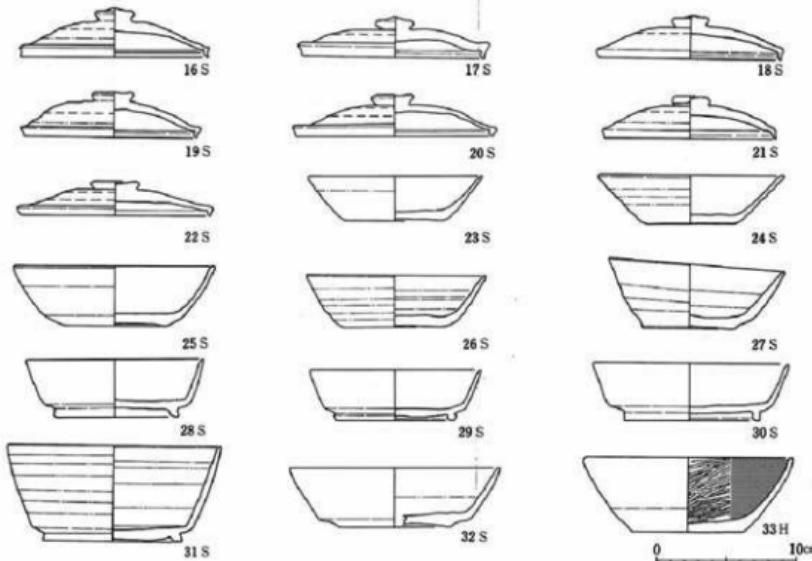
### 第3号住居址（第16図）

調査区の北東隅近くに位置する。第6号住居址をわずかに切る。南北5.2m、東西5.5mの方形で主軸はN-83°-Eである。北側は調査区外へ延びる。

床は地山のロームを固め堅緻である。壁は削平され遺存状態は良くない。カマドは東壁中央に位置し、今回調査した住居址中、唯一方向が異なる。遺存状態も良くなく、構造は不明である。柱穴は西壁に張り出したP1、2と中央部のP3、4が主柱穴と思われるが、建て変えの可能性もある。遺物の量は今回調査した住居址中、最も多く、器種も多様である。特に須恵器の蓋が多く出土している。(第17図16~22) 蓋は図示した他にも数点あるが、坏とセットになるものはない。他に須恵器、土師器の甕、1点であるが、灰釉陶器の瓶の破片が出土している。本址の時期は出土遺物より8世紀末と考えられる。



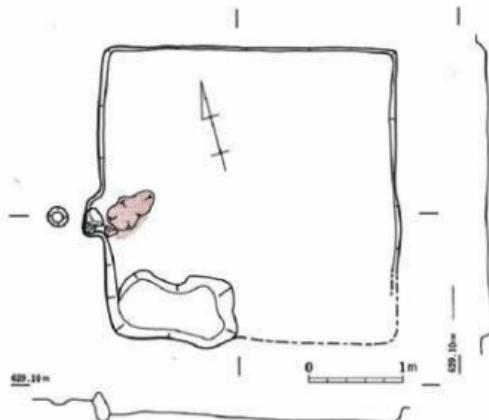
第16図 第3号住居址 0 1 2m



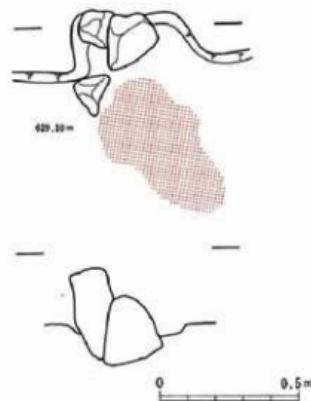
第17図 第3号住居址の遺物

### 第5号住居址（第18図）

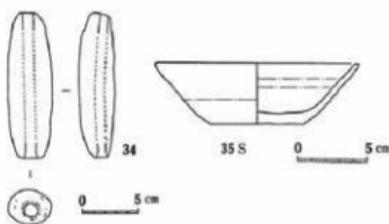
調査区の北東、やや中央寄りに位置する。第6、7号住居址を埋め南東の隅を第8号住居址に切られる。南北2.9m、東西3.1mの方形で、今回調査した住居址中、最も小さい。主軸はN-83°-Wである。床は地山と、6、7号住を埋めたロームを固め、堅緻である。壁高は平均約10cmと浅い。カマド（第19図）は西壁の中央やや南寄りに築かれている。遺存状態は悪く、石組の残骸と壁外に小ピットが残るのみである。柱穴等は確認できなかったが、南西の隅に大きな浅いピットがある。遺物は、土師器、須恵器が多く出土したが、図示できたのは、1点（第20図35）のみである。管状土錐（第20図34）は北東部の床上から出土した。須恵質で焼成は良好である。他に北東部より大型の砾石2点が出土している。本址の時期は出土遺物より、8世紀末から9世紀初頭と考えられる。



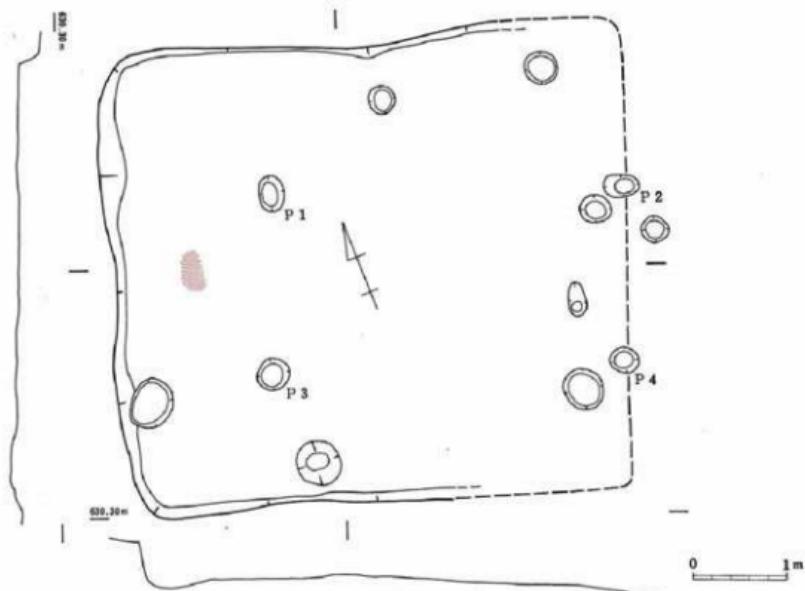
第18図 第5号住居址



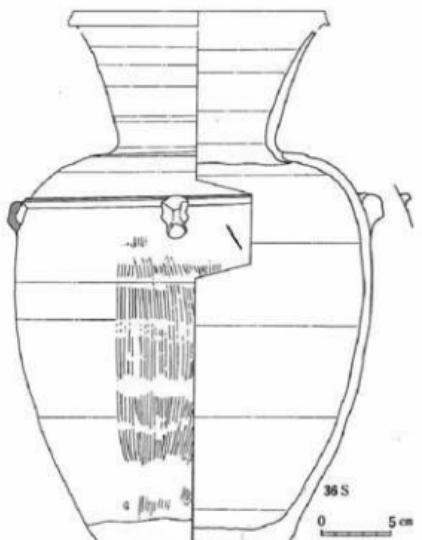
第19図 第5号住居址カマド



第20図 第5号住居址の遺物



第21図 第2号住居址



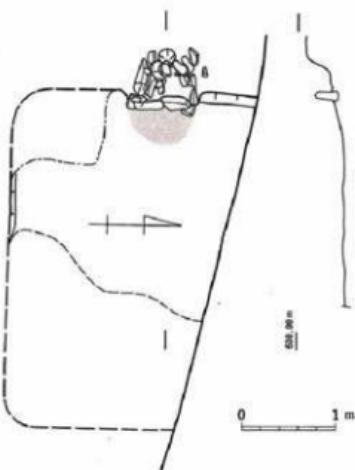
第22図 第2号住居址の遺物

### 第2号住居址（第21図）

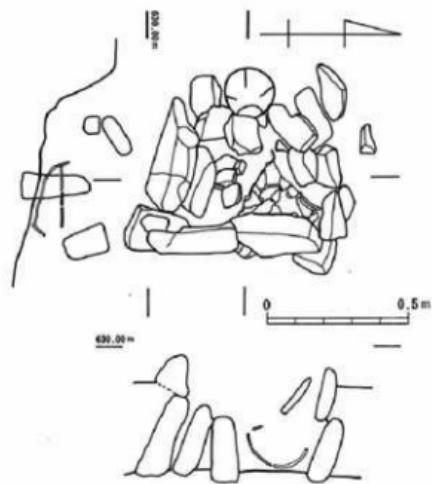
調査区のはば中央に位置する。南北4.6m東西推定6mの隅丸長方形で、主軸はN-72°Wである。埋土には礫が多量に含まれ、今回調査した他の住居址とは様相が異なる。床は地山の礫混じりのロームを固めており堅緻である。壁は傾斜に沿って削平され、東壁は全く残っていない。カマドは西壁中央部に焼土と遺物の集中が見られるが、構造等は不明である。柱穴はP1、2、3、4が主柱穴と考えられ、第3号住居址と同様、壁沿い、あるいは壁から突出して柱穴をもつ構造と思われる。その他のピット

の性格は不明である。遺物は覆土及び床面の上から土器、須恵器が多量に出土したが、復元、図示できたのは第22図の2点のみである。36の突帯付四耳壺はP3の南西部の覆土上層部より出土した。床面よりやや浮いた状態で出土しており、おそらく住居址廃絶後の埋没の途中で廃棄されたと考えられる。口縁部を欠くが、他の遺存状態は良好である。突帯より下の胴部外面には刷毛による縱方向の調整が施されている。これは類例のない珍しいものである。

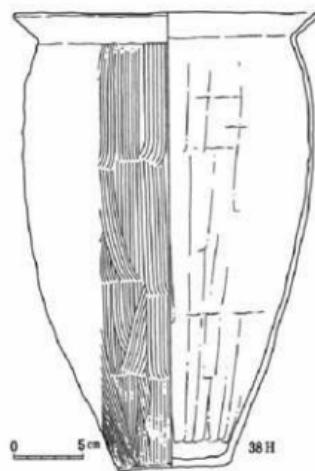
本址の時期は出土遺物より9世紀前葉と考えられる。



第23図 第10号住居址



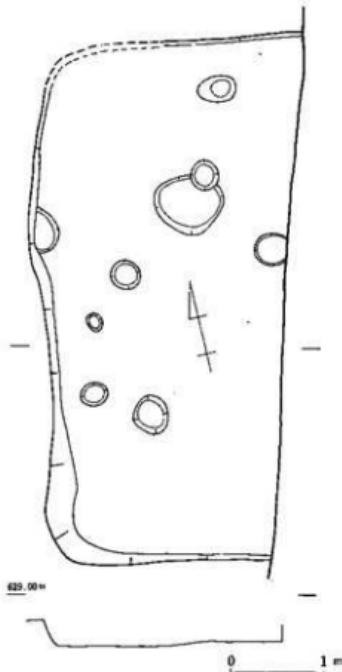
第24図 第10号住居址カマド



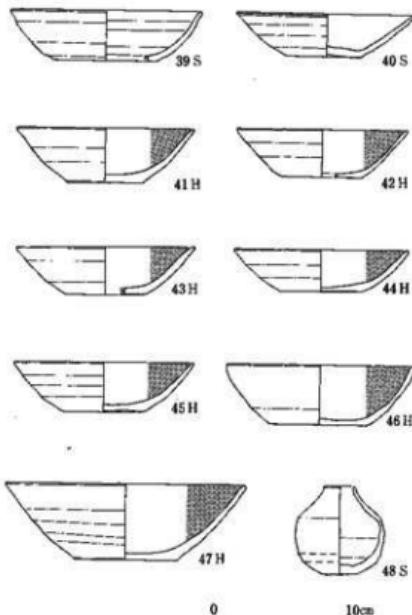
第25図 第10号住居址の遺物

### 第10号住居址（第23図）

調整区の中央部北の隅に位置する。南北は遺存部で2.7m、東西で3.6mの方形で、主軸はN-77°Wである。北側は調整区外へ延びる。搅乱や削平により破壊され、カマドと床、壁の一部が遺存するのみである。東側は断面の土層により端部を確認できた。床は地山の礫を含むロームを固めており、堅緻である。カマド（第24図）は西壁に築かれており、遺存状態は良い。石組みで、表面は粘土等で覆われていたと思われ、あまり焼けていない。石材は石英閃緑岩と砂岩が用いられている。正面は下部が開口し、上部は2つのブロック状の砂岩を組んでいる。袖は石を2段に積んでいる。カマドの中央には支脚石が立ち、その横に土師器の甕（第25図）が倒れていた。奥部には、煙道が開いているが、壁外へは延びていない。遺物はカマド内の甕の他、土師器、須恵器の小片が床面より出土したが、図示できたものはない。本址の時期は出土遺物より、9世紀前葉と考えられる。



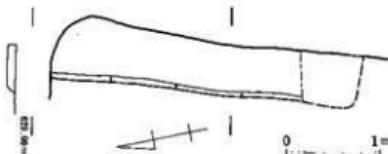
第26図 第8号住居址



第27図 第8号住居址の遺物

**第8号住居址** (第26図) 調査区東辺の中央部に位置する。第5、6、7号の各住居址を切っている。南北5.7m、東西は北壁で3m、主軸はN-71°-Wである。東側は調整区外へ延びる。床は地山のロームを固めており堅緻である。壁は削平され、遺存状態は良くない。カマドは確認されなかった。ピットは9つ検出されたが、性格は不明である。遺物は覆土及び床面より多数出土したが、図示できたのは、第27図の10点のみである。図示できなかった器種には、土師器、須恵器の甕がある。須恵器の小瓶(第27図48)は西壁中央部の床面より出土した。本址の時期は出土遺物より9世紀前葉と考えられる。

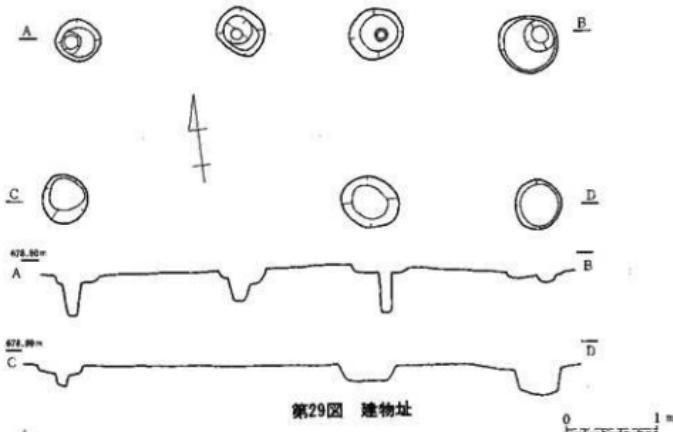
**第9号住居址** (第28図) 調査区の北東部に位置する。第6号住居址を切っている。南北3m、東西0.6mを検出したのみで、他は調整区外へ延びる。床は北側は地山のロームを固め、第6号住居址を埋める部分は埋土の上にロームを貼っている。壁は削平されており低い。南壁は断面で確認できた。ピット等は検出されていない。遺物は土師器、須恵器の小片がわずかに出土したのみで、図示できたものではなく、本址の時期を決定できるものもなかった。



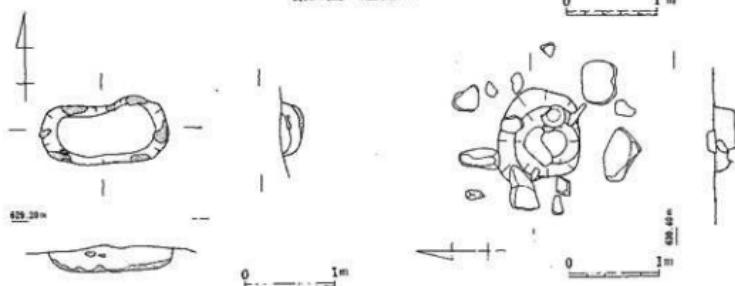
第28図 第9号住居址

**建物址** (第29図) 調査区の南東隅より検出された。柱穴の配置は北側4本、南側3本で、3間(5.4m) × 1間(1.7m)となるが、南側は調査区外へ延びるものと思われる。主軸はN-84°-Wである。柱間の距離は梁間1.7~1.9m、桁行1.7mである。柱穴はいずれも円形で、ローム直上の褐色土から掘り込んでいる。北側の4本と南側西端の1本は柱痕が明瞭である。本址に伴なう遺物は出土していないが、形態より本址の時期は平安時代と考えられる。

**火葬墓** (第30図) 調査区の中央部、第1、2号住居址の中間に位置する。南北0.5m、東西1.4mの不整横円形で、主軸はN-85°-Eである。埋土には焼土及び炭化物が含まれる。底は丸く壁高は約20cmである。壁及び底には粘土を貼った部分が見られ、焼土がブロック状に残る。遺存状態は良好である。坑内からの遺物の出土はない。性格は不明であるが、形態等より中世の火葬墓と考えたい。

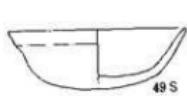


第29図 建物址

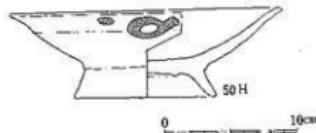


第30図 火葬墓

第31図 焼土坑



第32図 焼土坑の遺物



第33図 調査区外出土の遺物

**焼土坑（第31図）** 調査区の中央部、第2号住居址の南側に位置する。直径約0.5mの隅丸方形の浅い土坑が掘られ、その周囲に礫が分布する。土坑の埋土には焼土、炭化物は含まれないが、底は、わずかに焼けている。埋土の上に伏せたような状態で須恵器の壺（第32図）が出土した他は遺物はない。礫は調査区内の地形が斜面から平地へ変化する付近に普遍的にみられ、本址との関係は不明確である。遺構の年代は須恵器より8世紀前葉と考えられる。本址の性格は不明であるが、墓地的な施設と考えたい。

**土坑、ピット** 今回の調査では土坑70とピット58の計128が検出された。ほとんどが調査区西側の斜面と南東部の平地に位置し、北東の住居址集中部には少數のみである。遺物を伴なうものは全体の1/4足らずで、ほとんどが時期不明である。時代別では、縄文時代前期、中期、後期、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良、平安時代のものもあるが、分布の規則性はみられない。また性格を推定できるものもほとんどない。

**調査区外（西側隣接地）出土の遺物** 調査区の西側隣接地で今回の調査と同時期に建設工事が行なわれ、基礎の深掘りを行なった際、遺物の出土があり、立ち会い調査を行なった。その結果平安時代のものと思われる住居址1軒を確認した。第32図は隣接地より出土した土師器の皿である。口縁の約1/3を欠くのみで、他はほぼ完存する。内面全体に炭化物の付着がみられ、灯明皿等に使用されたものと考えられる。表面には斑状の付着物（墨書きか？）がみられる。時代は10世紀前葉と考えられる。確認された住居址はローム上層の暗褐色土中に床を作り、火災により焼失している。周辺からは、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土したが、小片で図示できなかった。灰釉陶器は美濃窯の虎渓山1号窯式期のものと考えられるが、他の遺物は各時代のものが混在し、住居址の年代は特定できない。周辺からは縄文時代の土器片も數点出土しており、このうちの1点はローム層の最上部より出土しており、小片のため確定できないが、縄文時代早期前半まで遡る可能性がある。他は今回の調査区より出土したものと同時期のものと思われる。今回立ち会いを行なった隣接地で遺物の出土があったのは西寄りのみで、調査区寄りに包含層等は認められなかった。

**検出面出土の遺物** 検出面よりコンテナ約1箱の遺物が出土した。土器、陶器、石器があり、今まで述べた各期のものの他には近世の陶器がわずかにあるのみである。器種も多様であるが、復元、図示できたものはない。

出土土器観察表

図No	出土地点	種別	器形	寸法(cm)			成形・調整・形態の特徴	備考・実測No
				口径	底径	高さ		
1	1住	S	蓋	(11.2)	—	(4.0)	ロクロナデ	1-1
2	#	H	環	(11.6)	—	3.5	ロクロナデ、底部手持ちケズリ、内外面ミガキ	1-2
3	#	H	環	(13.2)	—	4.0	ロクロナデ、底部手持ちケズリ、内外面ミガキ	1-3
4	#	H	甕	(15.6)	—	—	ロ頸部ヨコナデ、胴部内・外表面工具ナデ	1-4
5	#	H	環	—	—	6.4	外面部工具ナデ、内面上半工具ナデ、下半ハメ	1-5
6	#	H	環	22.6	7.2	3.8	ロ頸部ヨコナデ、胴部内・外表面工具ナデ	1-6
7	#	S	平瓶	—	7.2	8.6	ロクロナデ、胴部外面下半回転ケズリ、頸部接合のちナデ	1-7
9	4住	H	高坪	(15.6)	—	—	外面部下半持ちケズリのちミガキ、内外面ミガキ	内黒 4-1
13	7住	H	甕	(1.4)	(8.1)	(38.5)	ロ頸部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内外面ハメのちケズリ	7-2
14	#	H	環	(22.0)	(7.3)	(39.5)	ロ頸部ヨコナデ、胴部外表面ハケメ、内面工具ナデ	7-1
15	6住	S	环	(15.0)	(11.2)	(6.4)	ロクロナデ、付け高台	6-1
16	3住	H	蓋	(13.4)	(13.6)	(4.0)	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-1
17	#	H	環	12.5	13.6	2.8	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-2
18	#	H	環	12.8	13.4	3.1	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-3
19	#	H	環	(12.2)	(12.8)	(3.2)	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-4
20	#	H	環	14.0	14.6	3.0	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-5
21	#	H	環	12.2	12.4	3.0	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-6
22	#	H	環	(13.5)	14.0	2.8	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天津部回転ケズリ	3-7
23	#	H	环	(12.4)	(7.0)	(3.2)	ロクロナデ、底部回転余切	3-8
24	#	H	環	(13.0)	(6.2)	(3.4)	ロクロナデ、底部回転余切	3-9
25	#	H	環	(14.2)	7.0	4.3	ロクロナデ、底部回転余切	3-10
26	#	H	環	(12.6)	7.0	3.7	ロクロナデ、底部回転余切	3-11
27	#	H	環	12.6	6.5	5.0	ロクロナデ、底部静止余切	内・外面火ダスキ 3-12
28	#	H	環	(12.6)	9.2	4.1	ロクロナデ、底部回転ケズリ、付け高台	3-13
29	#	H	環	(12.0)	(8.2)	(3.6)	ロクロナデ、底部回転余切のちナデ、付け高台	3-14
30	#	H	環	(14.0)	10.2	4.1	ロクロナデ、底部回転ケズリ、付け高台	3-15
31	#	H	環	(15.2)	9.8	6.8	ロクロナデ、底部回転余切、付け高台	3-16
32	#	H	環	(14.8)	(8.0)	(4.2)	ロクロナデ、底部回転余切	内・外面火ダスキ 3-17
33	#	H	環	14.8	8.0	5.3	ロクロナデ、底部回転余切のち手持ちケズリ、内外面ミガキ	3-18
35	5住	S	環	(14.6)	6.8	4.3	ロクロナデ、底部回転余切	底部スサ痕あり 5-1
36	2住	H	四耳甕	—	13.8	—	胴部外周ハケメのち縦なヨコナデ、内面工具ナデ、肩部突起・片(4ヶ所)	2-1
37	#	H	环	(12.8)	5.4	4.2	ロクロナデ、底部回転余切	外面火ダスキ 2-2
38	10住	H	甕	(21.8)	8.3	33.0	ロ頸部ヨコナデ、胴部外周ハケメ、内面工具ナデ	外面炭化物付着 10-1
39	8住	S	环	(13.4)	(7.4)	(3.6)	ロクロナデ、底部回転余切	8-1
40	#	H	環	(12.3)	5.3	3.1	ロクロナデ、底部回転余切のち工具ナデ	8-5
41	#	H	環	(12.6)	(5.6)	(4.0)	ロクロナデ、底部回転余切	内黒 8-3
42	#	H	環	(12.2)	(5.8)	(3.6)	ロクロナデ、底部回転余切、内外面ミガキ	内黒 8-4
43	#	H	環	(12.8)	(5.4)	(3.4)	ロクロナデ、底部回転余切、内外面ミガキ	内黒 8-2
44	#	H	環	(12.6)	5.8	3.0	ロクロナデ、底部回転余切、内外面ミガキ	内黒 8-6
45	#	H	環	(12.6)	5.6	3.6	ロクロナデ、底部回転余切、内外面ミガキ	内黒 8-7
46	#	H	環	(13.4)	(6.8)	(4.3)	ロクロナデ、内外面ミガキ	内黒 8-8
47	#	H	環	(17.0)	7.3	5.5	ロクロナデ、底部回転余切、内外面ミガキ	内黒、スサ痕あり 8-9
48	#	S	小瓶	(2.2)	2.4	6.4	ロクロナデ、底部外周回転ケズリ	内面付着物あり 8-10
49	焼土坑	H	環	(13.4)	—	4.5	ロクロナデ、底部へラ切のちナデ	土-1
50	調査区外	H	瓶	(20.4)	10.7	6.5	ロクロナデ、底部回転余切、付け高台	墨書き (?)あり 検-1

## IV まとめ

今回の調査が行なわれた市街地北部は、古くから多くの遺跡の存在が知られている。しかし調査例は少なく、その様相は不明な点が多いのが実状である。

今回の調査地は当初、アドウ等の耕作による搅乱が予想されたが、遺存状態は意外に良好で、様々な時代の遺構、遺物が検出され、多くの成果をあげることができた。

縄文時代の遺構は、土坑、ピットが、わずかに検出されたのみであるが、包含層より早期末～前期初頭を中心とする多くの土器の出土があった。風化が著しく、図化等は困難であったが、周辺では比較的出土例の少ない資料を得ることができた。特に1点ではあるが、東海系の土器の出土は重要な意味を持つものである。またこれらにより、周辺での縄文期集落の展開が予想できよう。

弥生時代中期及び古墳時代前期の遺物は、少数の出土のみであったが、本遺跡北の狐塚遺跡と何らかの関連を持つものと考えられる。今後の様相解明に期待したい。

古墳時代から平安時代の遺構は、調査区東部に集中して検出された。古墳時代の第1号住居址は周辺では調査例の少ない時期のものである。中心部を欠くが、カマド等の遺存状態は極めて良い。金冠や平瓶の出土は居住者の性格の一端を物語るものといえよう。また床面出土の炭化材は、森義直氏による鑑定の結果、使用部位による材の選択の可能性を窺わせるものがあり、当時の住居構造を考えるうえで貴重な資料を得ることができた。他の住居は大半が調査区外へ延び、全容の把握は困難であったが、東側への集落の展開を予想させるとともに、連続して住居が営まれたことから、この地の持つ特殊性を想定させるものである。個々にみると第6号住居址の円形に近いプランは、類例のないものである。第2、3号住居址の壁に突出した柱をもつ構造は、市内では三間沢川左岸遺跡等に類例をみることができる。また遺物でも、第3号、8号住居址の食膳具のセット、第2号住居址の体部に刷毛目をもつ四耳壺、第5号住居址の大型の土鍤等、興味深いものが多い。

火葬墓は、単独での検出であり、時期決定が困難であったが、集落等、周辺の空間との関連が注目される。焼土坑もその性格は興味深いものである。

本遺跡は地理的に見ると大門沢川に沿って分布する遺跡群の一つであるが、西側の城山山麓より統く一群として把握することができる。現在までの断片的な資料をもとに推測すると、今回の調査区の東及び西側へ、ほぼ同じ標高での古代集落の展開が予想される。この集落の性格は現時点では想定が困難であるが、岡田地区での須恵器窯の操業や、国府との関連等、今後の調査を通じて解明すべき課題としたい。また市街化等、周辺の開発に際しての対応も必要である。

以上、充分意を尽くせなかった点も多いが、今回の調査の成果が、地域の歴史を解明するうえでの資料となれば幸いである。

末筆ではあるが、今回の調査、報告書の作成にあたって御協力をいただいた全ての方々に心よりお礼を申し上げ、結びとしたい。



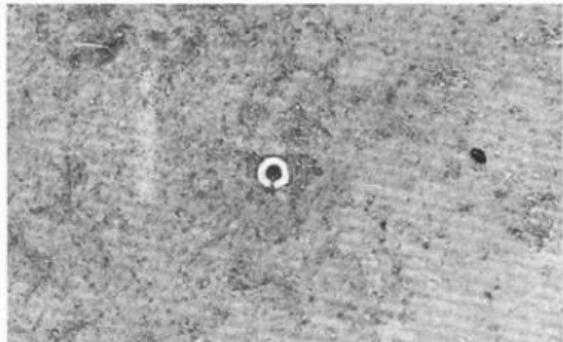
調査区全景 (西より)



第1号住居址 (東より)



第1号住居址 カマド



金環出土状態



第4号住居址 (西より)



第7号住居址 (南より)



第7号住居址 カマド



第6号住居址 (南より)



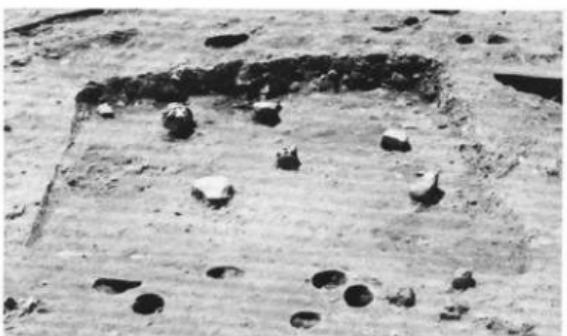
第3号住居址 (南より)



第5号住居址 (南より)



第5号住居址 カマド



第2号住居址 (東より)



第2号住居址 四耳壺 出土状態



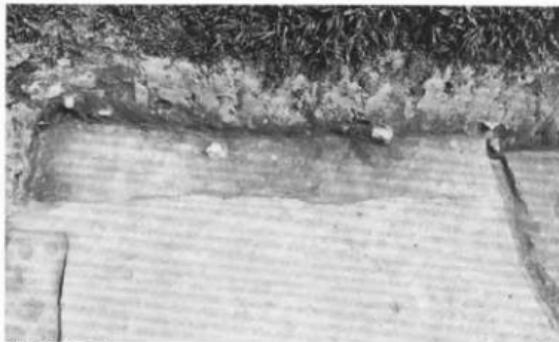
第10号住居址 カマド 掘り下げ前



第10号住居址 カマド 掘り上がり



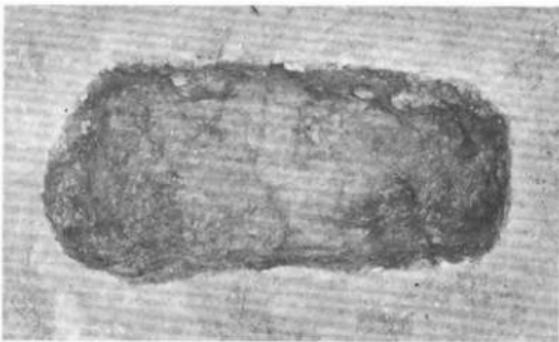
第8号住居址 (西より)



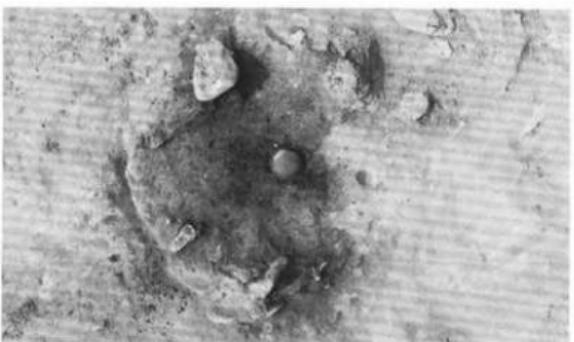
第 9 号住居址（西より）



建物址



火葬墓



焼土坑

---

松本市文化財調査報告No.78

松本市沢村旧射的場西遺跡

変電所建設に伴なう緊急発掘調査概報

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷株

---